



日常に使われている妙な訳語

氏平 祐輔

Ujihira Yusuke

野球で後攻のチームが勝っているときは9回裏の攻撃はしない。筆者が小・中学生だった1950年頃は、そこには α と書いていた。競技や試合で完敗したケースを“アルファ付きで負けた”などの表現もあった。その後、米国ではXと書いていると伝わり1960年過ぎには、新聞紙上でのスコアにはXと記載されるようになった。米国の新聞記者が筆記体でXと記したのを、日本人記者が α と勘違いした故だったそうだ。

外来語を取り込むとき、初めは耳に聞こえた音をそのまま使用したに違いない。1950年頃には、パイスケ（竹で編んだ土砂などを運んだもっこ“basket”）、馬穴（“bucket”）、ハツ（心臓“Herz”）、ペティナイフ（小型ナイフ“petit”）、ラムネ（炭酸飲料“lemonade”）、ヘボン（ローマ字の改良者 Hepburn 博士*1、映画「ローマの休日」で有名な女優の Audrey Hepburn

はヘップバーン）などの言葉を日常で見聞きしていた。

発音や表す事象が似ているために勘違いしたもの、例えば野球用語の tag out をタッチアウト“touch out”、tag up をタッチアップ“touch up”と言ったりする例がある。

思い込みで間違えたケースも多い。例えば football を蹴球と訳したケースなどは典型的な例であろう。かつてサッカー（association football）は蹴球と呼ばれていた。現在の日本サッカー協会（Japan Football Association、略称はJFA）も、1974年までは日本蹴球協会（1921年の創立時は大日本蹴球協会）、英国のThe Football Association（略称はFA）を英国蹴球協会、FIFA（フィフアFédération Internationale de Football Association）を国際蹴球連盟（現在は国際サッカー連盟）と訳していた。

現在でも、東京大学、早稲田大学、一橋大学

*1 James Curtis Hepburn：アメリカに移住したスコットランドの名家の子孫。眼科医。44歳のとき宣教医として来日。1863年、横浜でヘボン塾を開いた。高橋是清、益田孝、林薫らを輩出した。同塾は変遷を経て1887年に明治学院（現在の明治学院大学）となり初代総理。生麦事件の被害者リチャードソンの治療に当たる。また、眼病を患った岸田吟香（東京日日新聞の主筆、洋画家の岸田劉生の父、童話作家の岸田衿子や女優の岸田今日子の祖父）が、晩年、目薬“精滴水”の製造や販売を支援。和英語林集成を編集。新約聖書をローマ字で日本語に翻訳。日本名“平文”。

(前記3校はア式蹴球部), 筑波大学, 順天堂大学, 東京学芸大学などのサッカー部は蹴球部と称している。我が国の蹴鞠をイメージした故の誤訳であろう。

20世紀の前半に日本の影響が強かった韓国や北朝鮮でも蹴球と言っていた。中国では, 正しく足球と訳され, FIFAは国際足球联合会, 中国のサッカー協会は中国足球協会となっている。ついでに言えば, baseballもbase(基地, 塁)をめぐって得点する球技であるが, 野原でするから野球と訳したと言われている。

Kingdom of the Netherlands(ネーデルランド王国)がオランダとなった経緯も, ヨーロッパ北部の西海岸を占めるホラント(Holland)州から来た人が出身地を尋ねられたのに対して, “ホラント(州)から”と答えたことによるのであろう。アムステルダムは北ホラント州に, ハーグやロッテルダムは南ホラント州にある。ギリシャ(Greece)も正式な国名はHellenic Republicである。民族の祖とされるHellene女王の子息の国という意味で, 古代ローマ人がヘレン民族の植民地であるGréciaに住んでいたヘレン人をギリシャ人と言っていたのが始まりだそう。

こだわってみると, United States of Americaが米合州国でなく, 米合衆国と訳されたり, People's Republic of Chinaがチャイナ人民共和国でなく, 中華人民共和国と訳されているのに疑問を抱く人がいるようだ。

炭酸水は, 今でもソーダ水*2と称している。かつては重炭酸ナトリウムを素材として使っていたためである。

科学用語にも, 発音をカタカナで表記する際やや不注意にしまったり, 正確な中味を吟味しなかったり, 2以上の意味を持つ単語を取り違えて誤訳している例が, 岩波書店の理化学辞典にも見受けられる。

第1の例には, 一定量の試料溶液を採取するとき使用する全量ピペット(中空部分のあるピペット)はホールピペットとしている。独語のvollあるいは英語のwholeに由来すると教わったが, “ホール”と聞けば“hole”, “hall”が思い浮かぶので, それならフォルピペットあるいはフォルピペットと言う方がピンとくる。2番目の例に, violet(堇)がある。波長~400nmの電磁波の色が赤と青の混合色(中間色)である紫(purple)と混同されて訳され, それより短波長のultravioletも紫外線と誤訳されてしまった。violetは単色であり, purpleは青と赤の混合色である。violetを堇, ultravioletを堇外線と改めようと述べられた知識人がいた。中国でも紫外線と言っているそうなので, 発祥はどちらか分からない。

第3の例には, 化学反応の平衡の法則であるlaw of mass actionがある。高校の教科書にも現れるこの学術用語は“質量作用の法則”となっている。“mass”を質量と訳したのは誤りで, “mass communication(大衆伝達)”, “mass

*2 ソーダ (Na_2CO_3 , sodium carbonate, 炭酸ナトリウム, 洗濯ソーダともいう。ガラスの原料など)。苛性ソーダ (NaOH , sodium hydroxide, 水酸化ナトリウム。石鹼, パルプ, 人造絹糸などの工業材料)。重炭酸ナトリウム (NaHCO_3 , sodium bicarbonate, 重曹。酒石酸水素カリウムやリン酸2水素カルシウムなどの酸と反応し CO_2 を発生する。ビスケットやパンのベーキングパウダーや, クエン酸を加えて洗剤として使用。発生した炭酸ガスを水に吸収させると炭酸水(ソーダ水)ができる。現在では, ボンベに充填した二酸化炭素を水に吹き込んで作られる。東洋曹達工業(株) (→ 東ソー(株)), 日本曹達(株) (1920年設立, 創立者 中野友禮, 電解法による NaOH の製造), 日本曹達工業(株) (→ (株)トクヤマ, 1918年設立, 創立者 岩井勝次郎, Na_2CO_3 を製造), 北海道曹達(株), 大阪曹達(株) (→ ダイソー(株))などは, Na_2CO_3 , NaHCO_3 や NaOH を製造するために設立された。

education (多人数教育)”, “mass consumption (大量消費)” で使われる “大量” や “多数” の意味である。“大量作用の法則” とでも翻訳するのが妥当である、と聞いて合点がいった。質量作用とはどういう事象を意味するのか全く意味不明であった。最近の高校の化学の教科書や参考書では “化学平衡の法則または質量作用の法則” あるいは “化学平衡の法則 (質量作用の法則)” と苦しい表現になっていた。

また、有機化合物の構成成分である炭素、水素、酸素、窒素、ハロゲンなどの組成比 (分子中のこれら元素のモル比、即ち個数の割合、整数比) の測定行為の学術用語 “elementary analysis” は “元素分析” と訳されている。elementary は “基本的な” の意味なので、基本成分分析あるいは主要元素分析と翻訳するのが妥当である。ちなみに、elementary particle は基本的な粒子を示すので “素粒子” と訳されている。試料中の注目元素を定性分析あるいは定量分析する “元素分析” に対応する英語は “elemental analysis” である。

どう表現したらよいかと悩む語に iso がある。身近なところでは、isotope, isobar, isotone, nuclear isomer。それぞれ同位体、同重体、同中性子体、核異性体と訳されている。故 木村健二郎先生が “Radioisotope” の訳語が放射性同位元素となった背景を本誌 1971 (昭和 46) 年 6 月号の巻頭言に記されているが、議論の中身には触れられていない。iso はギリシャ語で平等、均等、同じなどを示す言葉だそうだが、iso は同型であるが異形を示すときに用いられるので、化学分野では、異性体 (化学物では構造異性体、官能基異性体、位置異性体、互変異

性体、幾何異性体、立体異性の光学異性体、回轉異性体など) と異なる面が強調された訳となっている。

一方、アイソトープ分野では、isotope (原子番号は同じで質量数や中性子数は異なっている原子核) は同位体と訳されるが、同位体効果などが認められるので、異性核とか、核異性体とか言う語を付した訳語の方がなじみやすいと感じている。isobar (質量数は同じで、原子番号や中性子数が異なっている原子核) を同重体、isotone (中性子数は同じで、原子番号や質量数が異なっている原子核) を同中性子体と称しているのも一考したいところだ。

また、準安定な励起核が γ 線を放出して遷移する事象を核異性体転移 (isomeric transition, IT 転移) と呼んでいるが、エネルギー順位が異なるだけの核種を核異性体 (nuclear isomer) とするのに違和感が拭えない。原子や分子の事象では、単に励起原子、励起分子と呼んでいる。

この表現は、メスバウアースペクトルで、核が置かれている電子密度の差異で共鳴位置がわずかにシフトする現象をアイソマー (異性体) シフト (isomer shift) と称すことにも繋がっている。このインデックスは、原子核位置での電子密度の差によるエネルギー準位差の相異を示している。化学分野では化学シフトと言っている。この 2 用語は化学と核物理分野間の命名の異なりで、訳の誤りではないのだが、しっかりこない。 γ 遷移する前の準安定核 (励起原子核) を核異性体と表現するに至ったゆえんを知りたいものだ。

(東京大学名誉教授)